

巻末言

冒頭に、大変失礼ではありましたが、このシンポジウムを成功に導く責任の半分は皆さんにありますと申し上げました。大変にご関心を持って聞いて頂き、質問の数、質の高さも含めて大変素晴らしい、半日間でありましたが、非常に充実した良いセッションであったのではないかと思います。

お忙しい中、お越し頂き、積極的にご参加頂き、主催者として、改めて心から感謝を申し上げます。この最後の参加というのが重要です。出席して頂くのは、もちろん嬉しいですが、出席するだけではなくて、やはり積極的に参加して議論を高めてもらいたいと考えています。そして、成功のために実質的なご貢献を頂くことで二重丸になります。今日のシンポジウムは、我々も含めて二重丸ではないかと思っているわけです。

今日のシンポジウムでは、まさに移民・難民、人権というような観点から話がなされました。これは裏返せば、トランプ候補の発言に現れているような、国際社会が抱えている矛盾を、積極的に受け入れて、それに対応するのではなく、できれば外側に追いやって自分のところには来てもらいたくないという対応の問題になります。

このように、国際化していく諸課題に対して、国際的な対応、あるいはマルチナショナルな（多国間の）対応をしてその解決に努力しようとするのではなく、孤立主義に陥って、自分だけよければいいという流れになっていっています。アメリカ第一（America first）、日本優先（Japan first）ということによって、狭量なナショナリズム、さらに言えば排外主義に走っていくというのが、この1年非常に顕著な形で出てきました。残念ながら

らこのトランプ現象は、きっとこれで終わることではなくて、次から次にトランプ現象なるものが拡散をしていくのだらうと予想しています。

そういう意味において、移民問題を語るということは、外から来る自分たちとは違った人たちをどうやって受け入れるのかという観点も非常に大事ですが、同時に自分たちの国のあり方、先ほどこどなたかが言うておられたように、自分たちが国内に抱える基本的な問題にきちんと対応して行くことができないままに、国際社会のインパクトに触れれば、当然、非常にゆがんだ形でそれに反応することになると考えられます。それが最大の大国であるアメリカでも出てきているという非常に慨嘆すべき状況ですので、それぞれの国、組織、大学、国際機関、NGOなどが、何ができるのか真摯に考える時であります。

ただ居るだけではなくて、今日のご参加の皆さまのように、自分たちが働きかける、自分たちが動くことによって、結果に何かの形で貢献していく、繋げていくということをやっていないと、これからの世界は、本当に予測できないものになりかねないと思います。「想定外」という言葉が数年前にはやりましたが、世界は想定外の状況に入っていて、われわれは準備していないということになります。

朝鮮半島情勢もそうです。すごく心配だよねと言いながら、では、きちんと準備したり対応したりしているのか、積極的に関与しているのかというと、そうは見えません。

下手をすると皆が三猿（Three monkeys）になりかねないという深刻な含意をもった質問を、今日の難民・移民の問題はわれわれに突きつけてい

るのではないかと私は思います。

今回、私たちはこのような世界的な議論の輪の一つに、ぜひ参加したいという気持ちをもって、このシンポジウムを開催しました。本日のシンポジウムを成功裏に終えることができたのは、参加して下さった皆様のお陰です。改めて心から御礼を申し上げます。またシンポジウムを開催いたし

ますので、次回もぜひ奮ってご参加頂ければと思います。ありがとうございました。

広島大学 平和科学研究センター長

元国際連合日本政府常駐代表 特命全権大使

西田 恒夫